藍野学院紀要，第20巻，2006，pp. 141 - 142

〔特別寄稿〕

紀要と私の歴史

高 橋 清 久*

藍野学院紀要が20号となった。20年間の歴史の重みは大きい。人間で言えば成人である。小山理事長の看護者の高等教育という教育理念のもとに誕生した藍野学院が立派に独り立ちしたことになる。3年前に藍野学院の目標の一つの区切りである大学設置が叶った。その間，理学療法士，作業療法士の養成も始まり，今その高等教育に力が入れられている。

私自身の20年間を振り返ってみると，実に様々な想い出がよみがえってくる。20年前の1986年には私は東京都神経科学総合研究所という研究所で医化学研究を行っていた。その研究所に入所したのが1974年であるから丁度12年を経過したことになる。私の研究テーマは生物リズムというテーマでネズミを使って副腎皮質ホルモンの日内リズムを研究していた。何故リズムの研究を行うようになったかといえば，私が精神科医になった時に入院していた躁うつ病の患者さんから強烈な印象を受けたためだった。その患者さんは躁と鬱とをくりかえすリズムの他に一日の中でも気分の変化が顕著だった。すなわち朝は青菜に塩で押し黙り食事もろくにとれない状態であったが，夕方からは笑顔を見せ，同室の患者さんと話したり，食事も美味しそうに食べたりしていた。このような朝夕の見事な違いをみて私はこの病気には体のリズムが関係しているのではないかと考えた。そこから私の生物リズム研究が始まったのだ。

20年前の1986年，同じ研究所に12年もいると最初の意気込みが衰え自分がマンネリズムに陥っていうことを感じた。また，元来精神科医というアイデンティティーがあったので，臨床に戻る気持ちが強くなった。そんな時に滋賀医科大学の精神医学教室から誘いを受けた。出身大学での先輩の教授がぜひ来いと言うのだ。そこで1983年滋賀医科大学に赴任した。丁度藍野医療技術専門学校の誕生した年だ。折角滋賀にきたのだからゆっくり腰を据えて臨床に取り組もうと張り切ったが，その2年後に幸か不幸か東京にある国立武蔵療養所の島薗所長からお呼びがかかった。武蔵療養所が近い将来国立精神・神経センターになるから付属研究所の部長で来るようにとの話だった。大先輩の命令であれば致し方なくわずか2年の滋賀生活にピリオドをうち東京に戻った。藍野学院短期大学がスタートした年である。

国立精神・神経センターでは研究所部長，病院長，総長と17年間にわたって勤めを果たした。定年退官でほっとしているところに藍野からお誘いを頂いた。そこで再び東京から関西に赴任したのである。思えば丁度20年前の再現である。滋賀に来た時には，初めて箱根の山を越えるという事で強い緊張を感じたが，今回は二度目の関西という意味で緊張感はそれほどではなかった，しかし，学長という重責を担うという別の緊張感が強かった。

さて，話を紀要に戻そう。私が多くの遍歴を重ねたこの20年間に，紀要は順調に育ってきたように思える。年々厚みを増し，その内容も充実してきた。紀要は学院の研究，教育活動の記録であり，また若い人材がその研究・教育成果を発表する機会を与えるものである。この紀要を初舞台として，その後に大きくはばたいて世に出た人材も多い。大学が設置されて学院の人材も多様化し，重層化した。それが内容に反映されている。また，外部にも投稿を求め，それによって論文の質と量が向上した。これまで紀要を育ててこられ

* 藍野大学学長

た先達や関係者の方々に敬意を表したい。

今後，さらに紀要は発展していくであろう。藍野大学は平成19年度には完成年度を迎える。そこで新たなカリキュラムを検討し，再編成し学生や社会のニーズに応えようとしている。今，看護も理学療法も作業療法も一様に教育施設が増加している。学生の確保，実習施設の確保，就職先の開拓等々課題は厳しさを増すであろう。しかし，藍野学院は医療施設と密接に結びついており，それが最大の利点である。そのような利点があることは，余裕をもって研究，教育にあたることができることにも通じる。藍野学院の特性である人間教育にも力を注ぐことが出来よう。そんな藍野の個性がこの紀要にも大きく映し出されるであろう。今後の紀要の成長を楽しみにしたい。